



南スーダンの独立・内戦・難民 ——希望と絶望のあいだ——

村橋 勲 著

京都 昭和堂 2021年 xvi+251+xlvi p.

南スーダンは、長年にわたるスーダン内戦ののち 2011 年に独立を果たしたが、2013 年以降再び内戦状態に陥っている。本書は、大規模な難民流出の起きた 2016 年以降に南スーダンからウガンダへと逃れて難民居住地で生活している人々をおもな調査対象としている。難民が発生することになった歴史的経緯や難民政策の変遷などについてもとりあげており、著者のフィールドワークによる豊富な事例と合わせてバランスのとれた著作となっている。

序章では、難民に関するこれまでの議論を検討しており、南スーダンに関心のある人だけでなく、難民問題に関心のある人にとっても有用な情報が提供されている。第 1 章と第 2 章では、南部スーダンの歴史と南スーダン独立後の政治的混乱までの経緯が先行研究を下敷きにまとめられている。第 3 章以降は、ウガンダにあるキリヤンドゴ難民居住地における南スーダン難民の生活を中心に議論が進められる。2016 年以降ウガンダにおける南スーダン難民への援助方針は、緊急人道支援から難民を開発主体とする自立支援へと大きく変化した。このような方針転換が難民にもたらした影響を調査していることも本書の大きな特徴である。マクロなデータだけではわからない状況が、フィールドワークによって明らかにされている。

多くの難民が難民居住地で食料生産を行っており、その収穫物の過半をウガンダの仲買人に売却して現金収入を得ているという報告は、緊急支援によって生存を維持する難民というイメージとは大きく異なっている。難民であるためにウガンダでの就労機会はインフォーマル・セクターに限定されがちだが、そのような制約下でも難民たちは賃労働や商業活動など、将来を見据えたさまざまな経済活動を実践している。生活向上に寄与する新たな相互扶助のエスニック・コミュニティも難民居住地には複数形成されている。ただし、このようなコミュニティ間の関係に母国の政治的対立が持ち込まれることで、難民居住地内での治安が不安定になる危険も孕んでいる。

著者自身の調査によって南スーダンからウガンダに逃れてきた難民の生活が具体的に提示されるのと同時に、彼らを取り巻く政治経済的な変化がもたらす生活への影響も明快な文章で分析されている。本書は優れた難民研究であり、アフリカ研究者だけでなく難民問題に関心のある人々にもぜひ手に取って欲しい本である。

児玉 由佳（こだま・ゆか／アジア経済研究所）

